ダニエル書8章9－27節 「横暴で狡猾な王」

1A 一本の角の増大 9－14

1B 天の軍勢の蹂躙 9－12

2B 荒らす者の期限 13－14

2A 幻の意味 15－27

1B 勇士のような者 15－19

1C 御使いたちの動き 15－17

2C 終わりの憤りの時 18－19

2B 解き明かし 20－26

1C ペルシアとギリシア 20－22

2C 背きの極み 23－26

3B 病になったダニエル 27

本文

ダニエル書 8 章を開いてください、今晩は、9 節から見ていきます。私たちは前回、ダニエルが、雄羊と雄山羊の幻を見たところを見ました。まだ時はバビロン、ベルシャツァル王の第三年です。しかし彼は、幻の中で後にメディア・ペルシア帝国の首都となるスサにいました。そこのウライ川のほとりにいました。それは、この幻がメディア・ペルシア帝国から始まるからです。その川岸に、メディア・ペルシアを表す雄羊が立っていました。西、北、そして南の方を角でついていましたが、思いのままにふるまって、高ぶっている姿でした。これが、この帝国の姿で、どんどん領土を拡張していくなかで高ぶっていたのです。

次に現れる雄山羊は、地には触れずに全土を飛び回っていました。西からやって来ています。これがマケドニアから現れたギリシア帝国です。雄山羊には、大きな際立った角がありました。それが、20 歳という若さで王となったアレクサンドロスです。彼は、10 年余りの短い期間に、南はエジプト、東はインドまでという、とてつもない大きな領域を制覇しました。その時に、雄羊であるペルシアと激突します。これもすべて、歴史の中で起こったことで、アレクサンドロス率いるギリシア軍と、ダレイオス三世の率いるペルシア軍が、初めはイッソスで、最後にガウガメラで戦います。

そしてアレクサンドロスは、32 歳という若さで死んでしまいます。そのことも、幻の中で大きな角が折れたことで預言しています。「8:8 この雄やぎは非常に高ぶったが、強くなったときに、その大きな角が折れた。」とあります。雄羊ペルシアは高ぶりましたが、雄山羊ギリシアも高ぶったのです。そして、角が折れた後に、四本の角が天の四方に向かって生えている姿で終わりました。これが、アレクサンドロス亡き後のギリシア帝国の姿です。四人の総督に分割されました。その中で際立っ

ているのが、シリアのセレウコス朝と、エジプトのプトレマイオス朝です。ダニエル書 11 章では、セレウコス朝が「北の王」、プトレマイオス朝が「南の王」と呼ばれます。

こうして、高ぶりが目立つペルシアとギリシアの動きの行き着くところに、今日見ていく、「荒らす者」が現れます。何を荒らすのか？それは周囲の国々を荒らし、人々を虐殺します。そして何よりも、ユダヤ人たちの聖所を荒らす忌まわしいことを行います。

1A　一本の角の増大　9－14

1B　天の軍勢の蹂躙　9－12

9 そのうちの一本の角から、もう一本の小さな角が生え出て、南と、東と、麗しい国に向かって、非常に大きくなっていった。

雄山羊の四本の角の一本から、さらに一本の小さな角が生え出たとあります。これが、アンティオコス四世、あるいは、「アンティオコス・エピファネス」という人物の預言となります。彼はローマに人質になっていましたが、王セレウコス四世の死後、王子の後見人となることに成功、そしてその息子を暗に葬り去ることに成功しました。紀元前 175 年に即位します。このように、何でもないところから巧みな口と計略によって権力を持っていきました。

ここで注意していただきたいのは、7 章のダニエルの見た夢にあった、第四の獣から出てきた「小さな角」と、こちら 8 章の角が異なるけれども似ているということです。7 章の第四の獣は、ローマ帝国の後の姿から出てくるもので、反キリスト自身です。8 章は、ギリシアから出てくる王です。けれども、彼の行うことは、終わりの日に現れる反キリストを見事に映し出すことになる、ということです。ですから、彼についての預言をしっかりと見つめ、またこちらは既に成就した歴史なので、歴史の中からもじっくりと見つめることにより、将来の獣がどのような姿なのかを予想できるということになります。ここでは、何でもないところから現れる、ということです。これが、アンティオコス・エピファネスにおいて成就しましたが、反キリストも同じように、何でもないところから現れると言ってよいのです。

ところで、彼の名前「エピファネス」の意味は「顕現」です。彼は自らを「セオス・エピファネス」と名のりました。まさに「現人神」であります。自らを高く引き上げ、自らが神になったことを宣言します。アンティオコス・エピファネス、またユダヤ人のマカバイ家についての記録は、プロテスタントの聖書では「外典」とされている「マカバイ記」にあります。旧約聖書は「マラキ書」で終わっていますが、このダニエル書によって新約時代にまでの歴史がつながっています。マラキが預言したのはペルシア時代ですが、ダニエルはペルシアからギリシア、そしてローマに至るまでそこで起こることを預言しています。「マカバイ記」は、このダニエルの預言にあるギリシアの歴史を確認するような

記録がたくさん載っています。

「南と、東と、麗しい国に向かって、非常に大きくなっていった。」とありますが、彼について有名なのは、南へのエジプト、プトレマイオス朝への遠征です。そこで勝利を収めた、征服まで行こうとしていたのですが、その地域の軍事バランスが崩れるのを恐れたローマ軍が介入して、断念せざるを得ませんでした。そして彼は帰る時に、エルサレムを徹底的に破壊します。彼の特徴は、究極のギリシア化、ヘレニズム化です。ユダヤ人がユダヤ人であることをやめるために、あらゆる迫害を行ないました。そしてローマへの賠償金を払うために、違法な取り立てを行ないました。そこで、ここで「東」とは、その時勃興していた、ペルシアにあるパルティア王国のことです。それから「麗しい国」は、まさにイスラエルのことです。主が気にかけておられるのは、この麗しい国イスラエルで何が起こるかということであり、そのことに集中して啓示をダニエルに与えられます。

10 それは大きくなって天の軍勢に達し、天の軍勢と星のいくつかを地に落として、これを踏みつけ、
11 軍の長に並ぶほどになり、彼から常供のささげ物を取り上げた。こうして、その聖所の基はくつ
がえされた。12 背きの行いにより、軍勢は常供のささげ物とともにその角に引き渡された。その角
は真理を地に投げ捨て、事を行って成功した。

ここが、荒らす忌まわしいことについての預言です。この男は、非常に大きくなり、高ぶっていますが、それは他の国の王たちにあるような武力による遠征だけで終わりませんでした。ここにあるように、「天の軍勢」にまで手を出したということです。これは、神の立てられたユダヤ人たち、その祭司たちのことを指しています。神の聖なる民に対して挑みかかったということは、そのまま彼らを守っている天使らに対して挑んだことになります。ダニエル書 10 章に、イスラエルの君としてミカエルが登場します。そしてここ 8 章と 9 章でガブリエルがユダヤ人とエルサレムについて神からの託宣を受け、ダニエルに話しています。その他、律法は天使から与えられたものであることを聖書は教えていますし（使徒 7:53 等）、彼らには天使らが付いていたのです。

そして「星のいくつか」と言っていますが、神の民自身のことです。聖書ではしばしば、神の民を「星の輝き」に例えています。アブラハムに対して、子孫が数多くなることを「星」のように増えると言われました。ダニエル書にも、12 章 3 節で「賢明な者たちは大空の輝きのように輝き、多くの者を義に導いた者は、世々限りなく、星のようになる。」と言っています。このように、神は世の権力が、神の民の献身や礼拝を覆そうと介入する時に、それは、目に見える祭具や祭儀のことではなく、天からの権威に対する挑戦であり、冒瀆と見なしていることが分かります。

ここでの荒らす者の背きは、アンティオコス・エピファネスだけでできるものではありませんでした。ユダヤ人の中に背徳者らがいたので可能でした。彼らの中にヘレニズム文化を積極的に受け入れて自分たちを生かそうとしていた者たちがいたので、アンティオコスは、この者たちを高く起用

しながら、伝来のヘブル人としての信仰を破壊しようとしました。

それで 11 節の、「軍の長に並ぶほどになり」という言葉があります。大祭司の地位を自分のほしいままにしたのです。当時、オニア三世が大祭司でありましたが、彼の弟ヤソンが、王に対して同胞をギリシア化すると約束し、多額の賄賂をエピファネスに渡しました。それで、本来、アロンのツァドク系が祭司にならなければいけないのに、この時点で王による任命制となってしまいました。そして、ビスガ族のシモンという人物がおり、彼がオニア三世と対立しました。彼は神殿に隠し財産があるとセレウコス朝の総督に伝えました。そのシモンの息子がメネラオスです。彼は、ヤソンよりもさらに多くの賄賂を王につぎ込んで、祭司職を買い取りました。そして、オニアを暗殺するのです。こうやって大祭司の制度が、金と権力の抗争の場と化してしまいました。

そして「彼から常供のささげ物を取り上げた」とあります。これは日毎に青銅の祭壇の上で献げるように神が命令された掟です。出エジプト記 29 章 38 節以降にありますが、朝に夕に、それぞれ雄羊をささげなさいと命じられています。これをエピファネスは止めさせました。止めさせただけでなく、同じところにゼウス神の祭壇を造り、そして豚を献げさせました。そして、豚の血を聖所中に撒き散らしたのです。それでここに「背きの行い」とあるのです。そのほか彼は、安息日を守る者、割礼を男の子に授ける者などを虐殺し、ギリシアの神々の祭りに強制的に参加させ、神に忠実なユダヤ人たちを徹底的に滅ぼし、さもなくは堕落させました。この、荒らす者のする背きの罪が、後に「荒らす忌まわしい者」という反キリストの呼び名となり、イエス様もオリーブ山で「マタ 24:15 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら」と言われたのです。

その該当する箇所を、マカバイ記第一 1 章 54 節から読みます。「第百四十五年、キスレウの月の十五日には、王は祭壇の上に「憎むべき破壊者」を建てた。人々は周囲のユダの町々に異教の祭壇を築き、家々の戸口や大路で香をたき、律法の巻物を見つけてはこれを引き裂いて火にくべた。契約の書を隠していることが発覚した者、律法に適った生活をしている者は、王の裁きにより処刑された。悪人たちは毎月、町々でイスラエル人を見つけては彼らに暴行を加えた。そして月の二十五日には主の祭壇上にしつらえた異教の祭壇でいけにえを捧げた。また、子供に割礼を受けさせた母親を王の命令で殺し、その乳飲み子を母親の首につるし、母親の家の者たちや割礼を施した者たちをも殺した。（54-61 節）」とてつもない迫害です。まさに聖所の基がくつがえるような出来事です。

2B 荒らす者の期限 13－14

13 私は、一人の聖なる者が語っているのを聞いた。すると、もう一人の聖なる者が、その語っている者に言った。「常供のささげ物や、あの荒らす者の背き、そして聖所と軍勢が踏みにじられるという幻は、いつまでのことか。」14 すると彼は答えて言った。「二千三百の夕と朝が過ぎるまで。そ

のとき聖所の正しさが確認される。」

二人の「聖なる者」が会話をしています。おそらく天使でしょう。ダニエルに聞こえるように話しています。この荒らす者のする背きの罪は「二千三百の夕と朝が過ぎるまで」と答えています。これが驚くべき正確さで、歴史上で成就しました。エピファネスによる徹底的な迫害とギリシア化に対して、反旗を翻したユダヤ人たちがいました。マカバイ家の人たちです。ユダの率いる軍がセレウコス軍を打ち負かし、エルサレムからも追放しました。この勇猛な戦いも、マカバイ記に詳細に記されています。その戦争の結果、後にユダヤ人の独立勢力であるハスモン朝が成立します。

紀元前 167 年に、セレウコス朝の将軍リシアスは、アンティオコスの代理としてユダヤ人らにゼウス神への奉納を命じました。エルサレムの祭司家やヘレニズム的な貴族らは親セレウコス朝の立場を取ってこれに従いましたがが、地方都市モデインの祭司マタティアが、これを強制した人々を殺害しました。そしてマタティアが五人の息子たちと共に山中に隠れると、セレウコス朝に対する敵意を募らせていたユダヤ人がそこに集まりました。マタティアはこれを軍に組織し、次第に本格的な反乱となっていきます。マタティアの死後、息子ユダがセレウコス朝からの独立を目指す戦争を開始しました。自分たちは貧弱な武装しかしていなかったのですが、ちょうどサウルの息子ヨナタンのように、「主の御心ならば、数が少ないのと、多いのは関係がない」と言って鼓舞し、勇猛に戦いました。それで、数々の戦いで相手側を撃破し、165 年末にエルサレムを包囲して、相手の軍を要塞に封じ込めて、エルサレムに入城しました。

そして 12 月 25 日、エルサレムからヘレニズム的な祭司を追放し、異教の祭壇を撤去することで神殿を清め、再び主なる神に奉献することができました。この出来事を記念するのが、「ハヌカー」と呼ばれるユダヤ教の祭りです。その二千三百日前、紀元前 171 年の初め、先にお話しした正統な大祭司であるオニア三世が殺害されて、ギリシアに取り入る祭司職が始まりましたが、そこから数えてハヌカーがちょうど、二千三百日になります。

ところで、マカバイ家のユダが神殿を清めたその日を、「ハヌカー」としてユダヤ人は祝っています。清めるに当たって、燭台を灯すための油は特別な調合が必要であり、時間がかかりました。一日分の油を合成して作ったのですが、次の合成まで八日かかりました。けれどもその八日の間、灯火は奇跡的に消えることがなかったそうです。それでハヌカーには、八本の枝のある燭台を使って光を灯してお祝いします。実は新約聖書に、この祭りのことが一箇所言及されています。ヨハネ 10 章 22 節です、新改訳ですと、「そのころ、エルサレムで宮きよめの祭りがあった。時は冬であった。」とありますが、共同訳には「神殿奉献記念祭」と訳されています。ハヌカーのことです。ですから時は十二月の季節であり「冬であった」とあるのです。そして、これらのことを、実際に事が起こる、約 400 年前にダニエルに伝えているということなのです。

ここで印象深いのは、「いつまでのことか。」と質問していることです。そして、二千三百の夕と朝が過ぎるまで、と答えています。つまり、この苦しみには終わりがあるということです。このような恐ろしいことはいつまでも続かない、神が終わりを定めているということです。19 節に、「終わりの定めの時に関わることだ」とあります。聖徒が獣の手に陥るのは、一時、二時、半時でした。これも定められていて、終わりがあります。また、教会ではスミルナの聖徒たちが死に至るまでの苦しみを受けますが、それも「十日間」と書かれていて、終わりがあることを教えています。私たちの受ける試練も、神の定めの時までのことであり、一時のもの、ゆえに耐え忍ぶことができます。

2A 幻の意味 15－27

1B 勇士のような者 15－19

1C 御使いたちの動き 15－17

15 私ダニエルは、この幻を見たとき、その意味を理解したいと願った。すると見よ、勇士のように見
える者が私の正面に立った。16 私は、ウライ川の中ほどから「ガブリエルよ、この人にその幻を理
解させよ」と呼びかけている人の声を聞いた。17 彼は私が立っているところに来た。彼が来たとき、
私はおびえて、ひれ伏した。すると彼は私に言った。「悟れ、人の子よ。その幻は終わりの時のこ
とである。」

ダニエルは 14 節まで、幻を見ていました。この意味を悟りたいと願っていたところ、「勇士のように見える者」が立っていたとあります。天に神に仕えている者ですが、それが勇士のようでありました。この激しい戦いの背後には、天の軍勢もいて戦っていたのです。私たちの信仰の戦いにも、御使いが仕えてくれています。イエス様が悪魔の誘惑を受けらえた時に、その後で御使いが仕えました。イエス様がゲッセマネの園で祈られた時も、御使いが助けました。こういった戦いです。

次に、ウライ川の中ほどから声がしました。ダニエル書 12 章 7 節を見ますと、川の水の上に、亜麻布の衣を来た人が語っているとあります。10 章には、その亜麻布の衣を着た方は、主イエス・キリストご自身ではないかと考えられる方です。主が、ガリラヤ湖で水の上を歩かれる前から、既にウライ川の水の上におられたのかもしれません。

そして、その声を聞いて答えたのは、あのガブリエルです。彼は、イエス様の御降誕と、その前にバプテスマのヨハネの誕生を告げに来た天使として知られていますが、ユダヤ人が福音書を読めば、逆に、「あっ、あのダニエルのそばにきて幻を解き明かした、あのガブリエルだ。」と思ったことでしょう。主のご降誕の約 550 年前に、ガブリエルは既にここで活動していました。彼は 9 章において、七十週の期間についての預言もダニエルに伝えています。メシアがエルサレムに入城されること、その後、殺されることも伝えています。つまり、彼は神の定められた時を告げるため、特にメシアの到来について告げる御使いであることが分かります。

2C　終わりの憤りの時　18－19

18 彼が私に語りかけたとき、私は地にひれ伏したまま意識を失った。しかし彼は私に触れ、その場
に立ち上がらせて、19 こう言った。「見よ。私は、終わりの憤りの時に起こることをあなたに知らせ
る。それは、終わりの定めの時に関わることだ。

ガブリエルに語られただけで、ダニエルが恐れ、彼の声を聞いただけで意識を失ってしまいました。彼は再び意識を失う時があります。10 章で、栄光の使い、先ほどの亜麻布を来た方に見えるからです。

そして、ガブリエルが伝えたのは、これが「終わりの憤りの時に起こること」であるということです。ですから、私たちはこれまでアンティオコス・エピファネスに至るまでの幻をそのまま解き明かしていましたが、ダニエルにとって近未来の預言に、私たちにとってはその歴史に、終わりの時の神のご計画が予め示されているということです。「憤りの時」とあります、そうです、アンティオコス・エピファネスに対する神の憤り、そして後に現れる反キリストに対して、神が憤りを注がれるのです。

2B　解き明かし　20－26

1C　ペルシアとギリシア　20－22

20 あなたが見た二本の角を持つ雄羊は、メディアとペルシアの王である。21 毛深い雄やぎはギリシ
アの王であり、その額にある大きな角はその第一の王である。22 その角が折れて、代わりに四本
の角が生えたが、それは、その国から四つの国が起こるということである。しかし、第一の王のよ
うな勢力はない。

ここまでは、先ほど説明したとおりです。メディヤ・ペルシヤをギリシヤが倒した後、その王アレキサンダーは夭折します。それから四人の総督に国が分割されます。

2C　背きの極み　23－26

23 彼らの治世の終わりに、その背く者たちが行き着くところに至ったとき、横柄で策にたけた一人
の王が立つ。

「治世の終わりに」とありますが、このアンティオコス・エピファネスが死んだ後、ギリシアの力は衰退の一途を辿ります。ローマがその地域に勢力を持ち、彼の死後 100 年後には滅ぼされることになります。

そして「その背く者たちが行き着くところに至ったとき」とあります。ペルシアからギリシアに向かって高ぶりから高ぶりへ、そして背きが起こります。11 章で詳しく学びますが、プトレマイオス朝とセレウコス朝の王たちの戦いは裏切りと憎しみと高ぶりが錯綜したものでした。その確執が頂点

に達した時にエピファネスが現れたのです。そして、これがこの世界の全歴史を示していると言ってもよいでしょう。国々が高ぶり、神を神と思わないようになり、その背きと欺きが極まる時に、横柄で狡猾な獣、反キリストが現れます。

それだけでなく、エピファネスは策に長けていました。非常に知性的で攻略と巧言によって地位を得ます。人々は、あからさまに横柄なことを言っている人に対しては、私たちは騙されませんが、巧言によって惑わしを受けます。11 章で彼の姿を詳しく見ることができます。彼は、人々には良く見せて、しかしその利己的な目的をその善意を見せながら、どんどん行っていきます。その権謀術数は非常に長けたものです。私たちの周りでも、良く見えるもの、聞こえの良いことの背後に、しばしば悪魔が働いているのを知っていますね。「Ⅱコリ 11:14-15a しかし、驚くには及びません。サタンでさえ光の御使いに変装します。15a ですから、サタンのしもべどもが義のしもべに変装したとしても、大したことではありません。」

そして 7 章に出て来た、あの小さな角、反キリストがそうでしたね。大きなことを語る口が角にありました。その口をもって、彼は神に対して汚しごとを語ります。「黙示 13:61 獣は神を冒瀆するために口を開いて、神の御名と神の幕屋、また天に住む者たちを冒瀆した。」

24 彼の力は強くなるが、自分の力によるのではない。彼は、驚くべき破壊を行って成功し、有力者たちと聖なる民を滅ぼす。25 狡猾さによってその手で欺きを成し遂げ、心は高ぶり、平気で多くの人を滅ぼし、君の君に向かって立ち上がる。しかし、人の手によらずに彼は砕かれる。

アンティオコス・エピファネスの狡猾さは、確かに彼自身の力ではありませんでした。その背後に、不法の霊、またサタンが働いていたことでしょう。そして「驚くべき破壊」を行ないました。それから、地位と成功を得て、有力者を滅ぼしただけでなく、聖徒の民、ユダヤ人を滅ぼしていきました。そして「狡猾さによってその手で欺きを成し遂げ」ます。多くの者と同盟を組みます。そして地位を高くした後に、その同盟を破棄します。けれどもすでに高い地位に着いているので、その違反を責めることはできません。責めたところで、反逆の罪で裁かれます。そして、最後に「君の君に向かって立ち上がる」と言っていますが、ユダヤ人のメシアに公然と立ち向かったとも、もしかしたら言えるかもしれません。そもそも、自分自身が神の現れだと言っているのですから。

そして、「人手によらずに彼は砕かれる。」とあります。彼の死に方は無残でした。マカバイ記第二 9 章に書かれていますが、彼はペルシアで戦っている時、退避を余儀なくされましたが、腹いせにユダヤ人も殺そうと思いました。ところが、「その言葉を言い終えるやいなや、彼の五臓六腑に激痛が走った。(9:5)」とあります。イスラエルの神、主が、致命的な一撃を与えられたとあります。そして、戦車からの落ち方が悪かったため、関節が外れ、傷だらけとなり、両目から蛆がわき、激痛が走ったとあります。そして異国の山中で無残な死をもって、その一生の幕を閉じたとあります。

そして、アンティオコス・エピファネスに当てはまるこれら一つ一つの特徴は、そのまま不法の人、反キリストにも表れます。この詳しいことは次回、見ていくことにしましょう。

26 先に告げられた夕と朝の幻、それは真実である。しかし、あなたはこの幻を秘めておけ。これはまだ、多くの日の後のことだから。」

ガブリエルは、念を押しています。二千三百日の幻について真実であると言っています。終わりには定めがあるのです。

それから、今の幻については、「秘めておけ」と命じました。それは、「多くの日の後のことだから。」です。御使いはこのことを、これからも繰り返します。最後の幻は、最後の戦いについてのことであり、彼は再び意識を失ってしまいました。けれども、その幻を御使いが告げた後に決まって、「この幻を秘めておけ」とダニエルに命じています。「封じられているからだ（12:9）」と言っています。こんなにもはっきりした、鮮やかな幻であるにも関わらず、それを知ることのできないというもどかしさと驚きが、ダニエルを満たしていたことでしょう。

しかし、私たちには多くの日の後のことではありません。「黙示録」です、これは「啓示録」であります。これまで隠されていたもの、封じられていたものが開示されるのです。そして、多くの日の後のことではなく、今すぐにでも起こることを語られました。ですから、私たちは主にあってこれまで読んで来たことは、切迫していることなのだと知ることができるのです。主はいつでも、私たちを地上から取り除かれてもおかしくありません。ますます、不法の秘密が働いています。

3B　病になったダニエル　27

27 私ダニエルは、何日かの間病気になったままでいた。その後、起きて王の事務を執った。しかし、私はこの幻のことで驚きすくんでいた。それを理解できなかったのである。

「病気になったまま」とありますが、天使ガブリエル本人が神の言葉を告げたので、その栄光と聖さに触れたからでしょう。そして「驚きすくんでいた」とあります。理由が「理解できなかった」からです。示されているのに知らされていない、悟れないもどかしさです。

特にダニエルにとっては、エルサレムに同胞が戻り、神殿を再建するということなのに、それなのに神殿が荒らされるのか？という驚きがあったことでしょう。一体なぜ？という思いが走っていたと思います。神の人であるがゆえに、先の事を知らされた葛藤です。弟子たちもそうであったでしょう、キリストであることが示されたのに、なんとローマの十字架です。けれども、三日目に甦るとイエス様は言われていたのです。私たちも、神に現実を、厳しい現実を示されるかもしれません。しかし、その後に将来と希望があります。暗闇のトンネルの向こうは光なのです。